

## 審査の結果の要旨

氏名 久保 貴俊

本研究は、生検法についてのエビデンスが乏しい原発不明がん診療において、画像ガイド下経皮的針生検の有用性を明らかにするために、国立がん研究センター中央病院および東京大学医学部附属病院で原発不明がん疑い症例に対して施行された画像ガイド下経皮的針生検の成績を後方視的に解析し、また同時期に施行された手術生検症例との比較検討を行ったものであり、下記の結果を得ている。

1. 画像ガイド下経皮的針生検の検討では、国立がん研究センター中央病院症例、東京大学医学部附属病院症例いずれにおいても、高い診断成功割合 98.9% (95%CI : 93.9-99.8%)、100% (95%CI : 72.2-100%) を示し、手技関連重症合併症もほぼ全例で認めず、高い診断能と安全性を示していた。
2. 手術生検との比較検討では、診断成功割合は画像ガイド下経皮的針生検で 98.9% (95%CI : 93.9-99.8%)、手術生検で 100% (95%CI : 87.5-100%)、手技関連重症合併症割合は画像ガイド下経皮的針生検で 1.1%、手術生検で 0% でありいずれも有意差を認めず、生検において最も重要な診断能と安全性で画像ガイド下経皮的針生検は手術生検と同等の成績を示していた。
3. 生検までの平均日数 (SD) は、画像ガイド下経皮的針生検で 6.5 日 (5.4)、手術生検で 21.3 日 (15.4) であり、有意に画像ガイド下経皮的針生検で短かった。進行がはやく予後不良な原発不明がんにおいてより早急な治療方針決定・治療介入が望ましく、より迅速に施行可能な画像ガイド下経皮的針生検は原発不明がん診療の生検法として好ましいと考えられた。
4. 全身麻酔を用いた症例は画像ガイド下経皮的で 0%、手術生検で 37.0% であり、有意に画像ガイド下経皮的針生検は全身麻酔を用いた症例が少なかった。進行がんを多く含む原発不明がんでは全身状態が不良であることも多く、全身麻酔使用割合がより少ない画像ガイド下経皮的針生検は手術生検に比して好ましいと考えられた。

以上、本論文は原発不明がん診療の生検法として画像ガイド下経皮的針生検は十分かつ手術生検と同等な診断能と安全性を有しており、生検の迅速性や麻酔による侵襲性については手術生検より優れていることを明らかにした。本研究は、原発不明がん診療における生検法について病変の局在や性別を限定せず検討を行った最初の報告であり、画像ガイド下経皮的針生検が原発不明がん診療の生検法として推奨される根拠の一つとなると考えら

れ、学位の授与に値するものと考えられる。